

輸入検疫で発見された主な病害虫

平成4年に輸入された植物から発見された重要病害虫は別表のとおりである。このうち、携帯品として旅行者が持込んだ果物から輸入禁止対象害虫のチチュウカイミバエやミカンコミバエなどが

多数発見されている。また、わが国が特定重要害虫に指定しているゾウムシ類4種が発見されている。

	発見病害虫名	寄生植物発見回数	輸出国別発見回数
輸入禁止品対象害虫	<i>Ceratitis capitata</i> チチュウカイミバエ	トウガラシ(4) マンゴウ(3) モモ(2) リンゴ(1) オレンジ(1) カキ(1) ビワ(1) マルメロ(1)	ペルー(7) ブラジル(2) アルゼンチン(1) エジプト(1) ギニア(1) キリシャ(1) パラグアイ(1)
	<i>Dacus dorsalis</i> ミカンコミバエ	マンゴウ(66) レンパ(27) パンレイシ(23) パンジロウ(22) リュウガン(19) 他19種(56)	台湾(85) タイ(58) フィリピン(49) インドネシア(7) シンガポール(7) 他5か国(7)
	<i>Dacus tryoni</i> クインスランドミバエ	パンレイシ(1)	タヒチ(1)
	<i>Dacus cucurbitae</i> ウリミバエ	ササゲ(1) トカドヘチマ(1) ニガウリ(1) ヘチマ(1) ユウガオ(1) ヤサイカラスウリ(1)	台湾(2) インド(1) タイ(1) バングラデッシュ(1) フィリピン(1)
	<i>Cylas formicarius</i> アリモドキゾウムシ	サツマイモ(4) オクラ(1)	台湾(3) フィリピン(2)
特定重要病害虫	<i>Anastrepha ludens</i> メキシコミバエ	モモ(4)	メキシコ(4)
	<i>Anastrepha fraterculus</i> ミナミアメリカミバエ	パンジロウ(3) グレンシ(1) コーヒーノキ(1) マンゴウ(1) ジャボチカバ(1)	ブラジル(6) メキシコ(1)
	<i>Diabrotica undecimpunctata</i> ジュウイチホシウリハムシ	ブルーベリー(1) セロリ(1)	アメリカ(2)
	<i>Otiorynchus ovalis</i> イチゴクチブトゾウムシ	モミ属(4) トウモロコシ(1)	アメリカ(5)
	<i>Otiorynchus sulcatus</i> キンケクチブトゾウムシ	ルバーブ(1)	ベルギー(1)
	<i>Pantomorus cervinus</i> フラーパーゾウムシ	リュウコスベルマム(2) プロティア(1) フェイジョア(1) ブドウ(1)	ハワイ(3) アメリカ(1) ニュージーランド(1)
	<i>Zabrores subfasciatus</i> ブラジルマメゾウムシ	ライマメ(10) ササゲ(2) インゲンマメ(2) タケアズキ(1) ヤエナリ(1)	カンマ(15) ブラジル(1)
	<i>Dendroctonus ponderosae</i> アメリカマツノキイムシ	ホワイトバイン(3)	アメリカ(3)
	<i>Radopholus similis</i> パナナネモグリセンチュウ	ショウガ(4)	インドネシア(4)
	<i>Colletotrichum capsici</i>	トウガラシ(7)	タイ(3) インド(1) 台湾(1) インドネシア(1) シンガポール(1)

海外のニュース オウトウのチェリーモットルリーフ病の病原体を確認

オウトウのチェリーモットルリーフ病(cherry mottle leaf)は、1920年にアメリカ合衆国で発見され、1935年伝染性病害であることが確認されたが、その病原体は解明されていなかった。本病はオウトウの重要な病害で、北アメリカ、ヨーロッパ及び南アフリカに分布している。

本病は、葉に不規則な退緑斑を生じ、特に新梢は頂葉の生長が抑えられ、節間が詰まり口ゼット状を呈する。また、果実は小さく、熟期が遅れ、無味となることから、収穫果実は質・量ともに大きな被害を受けている。

これまで本病の検定には、感受性品種であるオウトウ「ピング種(Bing)」に接ぎ木することによって行われてきたが、カナダの植物検疫所のスタッフによって病原体が初めて確認され、早期検定法が確立された。

これによると、ニコチンを含むPH9.5のトリス緩衝液を用いて、り病したオウトウ若葉の汁液をキノアに接種したところ、葉に退緑斑点を生じ、全身感染させることに成功した。

この葉を用いてウイルスを純化し、オウトウに対する病原性があることを確認した。このウイルスは、クロステロウイルスグループ(Closterovirus)に属する約760nmのヒモ状粒子で、耐熱性は50~55℃、耐保存性は24時間であり、核酸の分子量は8.2kbと推定されている。

また、この純化ウイルスを用いてモノクローナル抗体を作成し、ELISA法とウエスタンブロット法により、本病をり病させたキノアとオウトウ及び自然感染したオウトウから本病原体を検出することに成功している。

従来のピング種を用いた検定では、3か月を要していたが、本研究の結果、ELISA法を用いることにより迅速な検出が可能となった。

(Plant Disease/March 1993)

発行所 横浜植物防疫所
〒231 横浜市中区北仲通5-57 ☎(045)211-7155
発行人 大川 義 清
編集責任者 釧 持 秀 禎
印刷所 内村印刷株式会社